



*年の瀬 (LA FIN D' ANNEE)

時がドンドンと音を立てて過ぎ去ります。12月になりました。それももう半ば過ぎ、間もなくクリスマス (le Noël)、そして今年も終わろうとしています。早いものです。アパートの窓から眺めると、杉の木の濃い緑が目立つ他は、前の2本のポプラ (le peuplier) を始め、木々はすっかり葉を落として枝ばかりの坊主、今迄は葉に隠れていた小鳥の巣 (le nid d'oiseau) や丸いヤドリギ (le gui) が枝に引っ掛る様に見えています。灰色の空、湿った大気が霞んで、偶に顔を出す太陽の光は斜めに弱々しく、黄色を帯びています。ですから朝夕と昼間の気温に大差ありません。日が短いので、暗いうちから起き、出掛ける時も未だ暗く、そのままメトロに乗って、、、目的地へ着いても薄暗く、建物の中は1日中電灯の光、帰る頃は既に暗く、、、光不足による病人が多いのも頷けます。クリスマスのイルミネーションばかりが眩しく感じます。走るメトロの車内でアコーディオン (l'accordéon) を弾くオジサンは“ジングルベル”で始め、続いて“ラ・クカラッチャ”、“ブルームーン”と思えば“カリンカ”、、、と陽気なメドレー。弾き終われば「ボン・ヴォアイヤージュ、ボンヌ・ジュルネー、ジョワイユー・ノエル、ボン・ナンネー!!!」 (Bon voyage, Bonne journée, Joyeux Noël, Bonne Année !!!) と忙しく、そう云う自分も幼稚園でサンタクロース (le père Noël) を3度も務めて賑やかな年の瀬です。12月に入って気温が零下になったのはパリでは3度だけ、気象庁 (Météo France) によれば、年間の平均気温は例年よりも1,2°C高く、2014年は1900年以来の暖かな年なのだそうです。(2014 sera l'année la plus chaude depuis 1900 en France, avec une température moyenne annuelle qui devrait dépasser de plus de 1,2 degrés C la normale.)

*クールベの大作、公衆の面前で修復

(LE CHEF-D' OEUVRE DE GUSTAVE COURBET EST RESTAURE EN PUBLIC)

パリのオルセー美術館にあるギュスタヴ・クールベ (1819-1877) の22 mもの大作「画家のアトリエ」 (1854-55) が、時代と共に傷みが激しく、修復が必要となり、此の度入場者の見ている前で作業を開始しました。(《 L'Atelier du peintre », un immense tableau, très abîmé par le temps, est toiletté devant les visiteurs) こうした作業は嘗てルーヴル美術館でも同様にヴェロネーゼの大作「カナの饗宴」を入場者の前で修復をしたことがあり、2度目のことです。(Ce n'est que la seconde fois, après « les Noces de Cana », également un immense format, de Véronèse, au Louvre, qu'un tableau phare est toiletté devant les visiteurs) この修復作業はこれから1年間続けられ、ガラスで囲まれた丁度水族館の中の様な所で、見学者の声も聞こえないよう防音装置が施され、担当者は見学者の視線を感じない様に注意しながら作業に努めています。

この画には、クールベを支えた友人や世話をした人たちが大勢描かれていて、右の方に詩人のボードレールも見えますが、その愛人ジャンヌ・デュヴァルも描かれていたものを、私生活の事だからとボードレールがクールベに消すように頼み、確かに消されたのですが、今回の作業で「悪の華」の愛人の顔が幽霊の如く現れて、隠されたロマンが大きな話題となっています。(Courbet a peint Baudelaire et sa maîtresse, Jeanne Duval, mais le poète ne voulait pas divulguer sa vie privée, et lui a demandé de l'effacer, ce que Courbet a accepté. Cependant, avec le temps, le visage de l'amante de l'auteur des « Fleurs du mal » est réapparu sur la toile. C'est un roman caché.)

オルセー美術館 (月曜を除く毎日 09時30-18時00、入場料11ユーロ)
クールベ展示室 (Salle Courbet)



*ノートルダムのツリーにはトゲがある (DES EPINES POUR LE SAPIN DE NOTRE-DAME)

パリのノートルダム大聖堂は正面の広場(le parvis de Notre-Dame)に高さが30mもあるクリスマス・ツリー(le sapin de Noël)を立てることが永年の慣わしとなっている為、パトリック・ジャカン司教は、例年通り信者や地元の商店会に献金を募りましたが(Comme à son habitude, Monseigneur Patrick Jacquin fait appel aux fidèles et aux commerçants



du quartier pour acheter un sapin devenu traditionnel.) 今年是不景気な所為か十分な金額が集まりませんでしたので、外国の篤志家に募金を呼びかけました。そこへアレキサンドル・オルロフ駐仏ロシア大使(l'ambassadeur russe en France, M. Alexandre Orlov)からロシアのモミの木を寄附するとの申し出がありました。しかし、ロシアの森からパリへどうやってそれを運ぶか、莫大な費用が必要ですが、教会にその余裕が無く、困っていたところ、今度はロシア政府が動いてトレーラー・トラックが手配され、ロシアからヨーロッパを横断して30mのモミの木は無事パリに到着、ノートルダム大聖堂前の広場に立てられました。既にご覧になった方も多いと思いますが、現在対ロシアへの貿易規制が布かれ、ウクライナ問題等で政治的にもギクシャクしている状況から、“これは何か狙いがあるのではないか、どうもトゲがあるようだ、裏があるに違いない。”ともっぱらの噂です。ツリーの根元には寄附に対する感謝を表わす言葉を記したプレートを立てたのですが、これも何者かに持ち去られて無くなってしまいましたので、巷の論争が続いています。

*クリスマスと大晦日、祝いの食事 (LES MENUS DES REVEILLONS DE NOEL ET DE SAINT SYLVESTRE)



クリスマスの夜、ミサから帰って祝う食卓、そして1年の締めくくりの大晦日の食事には、普段は高くてなかなか手の出ない贅沢なものを奮発します。シャンペンで乾杯してから、牛牡蠣や海老などの海の幸(les fruits de mer)、スモークド・サーモン(le saumon fumé)に辛口のアルザスの白ワイン“リースリング”(le riesling)、フォアグラ(le foie gras)には貴腐ワイン“ソーテルヌ”(le sauternes)、或いはキャビア(le caviar)に冷えたウオッカ(la vodka)、といった前菜に続いて主菜はローストした七面鳥(la dinde)、ホロホロ鳥(la pintade)や鴨(le canard)、それに栗を添えますが、最近では“シャポン”(le chapon)と呼ばれる霜降り肉の和牛の様に育てたチキンのローストが人気です。ワインはボルドー、ブルゴーニュ、ルシヨン、、、赤白お好みのものを、シャンペンで通すのも悪くはありません。季節のチーズは“モンドール”(le mont d'or)、デザートは南仏流に砂糖漬けの果物、ドライフルーツ、アーモンド、ヘーゼルナッツ、胡桃などナッツ類、等々を盛り合わせ、その中から13個を選んで食べると“福が来る”と云われます。薪の形をしたケーキ(la bûche de Noël)やチョコレート、アイスクリームも出されます。しかし、以上にご紹介したのはほんの一例で、丁度日本の正月の雑煮、餅、お節料理の様に、地方によっても、家庭によっても異なることは言うまでもありません。

*2014年12月22日「冬至」(LE SOLSTICE D' HIVER) 日の出08時41・日の入16時56

気温：パリ朝夕7℃/日中10℃ 曇天、ニース 8℃/15℃ 晴天、ストラスブール 4℃/8℃ 曇天
今日から春に向かって少しずつ日が長く、明るくなっていくと思えば、何か希望に胸膨らむ思いが致します。今年も皆様から頂いたご厚意に心より感謝申し上げます、皆様が平穩無事に年末年始を過ごされます様、お元気で新たな年をお迎え下さいます様お祈り申し上げます。新たな年は“羊”、「羊大なる哉 = 美」(菅)